



～最期はご自宅で～

Bさんは認知症でした。初期の段階は、物忘れは軽度でしたが、ものとられ妄想があり、これにより、ご家族、特にお嫁さんに対しては、「財布をとっただろ！」等、辛くあたること多かったようです。お嫁さんは、最初のころは認知症と思わず、ただ責められてるばかりで辛い思いをされていましたが、認知症の診断を受けてからは、「これは病気のせい」と思うようにし、Bさんの妄想が激しい時は、息子さんに対応を任せるなどしていたようです。

徐々に認知症は進行。ご近所にお嫁さんの悪口を言ったり、遠く離れた場所まで歩いて行ってしまったり、ご家族の介護は、他者を巻き込んで大変になっていったそうです。

私共、訪問看護は、Bさんの活動が少しずつ低下した頃、状態観察や排便コントロール等の目的で介入が始まりました。笑顔を見せたり、時には、怖い表情だったり…気分が向かないと私たちには全く協力してくれません。私たちは、Bさんの気持ちを大事にしながら、時々状況に合わせてケアの実施に心がけました。

2～3年ほどそんな状況が続いたBさんでしたが、次第に食事量が減って、活動も少なく、寝たきり状態に至りました。そのような時期を迎え、私たちは、Bさんの今後につきご家族にご意向を伺うこととしました。息子さんは家で看取りたい…と。訪問看護では、いつも介護しているお嫁さんはどうだろうと心配もありましたが、お嫁さんは「10年前が一番大変でした。私に対してすごく怒鳴ったり、

なじったり、と。でも、それまでは家のこともやってくれて、いい義母でした。病気だから仕方ないと思ってはいました。でも大変でしたね。ただ、こうなってしまうときみしいものです。介護の時は夫も協力してくれたからなんとかやって来れました。義母も家で亡くなりたいたいと思うので見ていきたいとします」と、お家で看取ることに納得されました。

Bさんの死期が近づくにつれ、動揺し不安を増す息子さんの傍で、お嫁さんは冷静に、私たちのアドバイスを聞いてくださいました。

主治医の先生も熱心に看てください、Bさんは、自宅で静かに息を引き取りました。

長男さんはもちろん、お嫁さんも涙し、でも家で看取ることができた満足感もあり、哀しみの中にも笑顔もみられました。

長い介護生活、大変なことが多かったと思いますが、最期の時に笑顔になれたのは、訪問看護としても嬉しいことでした。

介護は、いつまでと期限がありません。疲れてしまったり、先が見えず不安にかられたり、強いストレスとなることが多いものです。一人で悩まず、より多くの人に相談できる環境を作っていくことが大事です。



**私達は皆様のホームナースです！
いつでも介護相談に乗っています。**

訪問看護のお問い合わせは 一之瀬訪問看護ステーション
電話 48-6615 まで